

## <論文> 『今昔物語集』における変身譚

著者	永藤 美緒
雑誌名	日本文学誌要
巻	62
ページ	29-37
発行年	2000-07-08
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00020119">http://hdl.handle.net/10114/00020119</a>

## 『今昔物語集』における変身譚

### (一) 〈密閉型〉と〈境界型〉

鬼や狐といった異類との遭遇の場として、川や橋など境界的な場所は、様々な説話研究の論文において注目されている。このような異類のなかには、化身のもの、つまり人間に姿を変えて現れるものがある。霊鬼の説話を集めた『今昔物語集』巻二十七の説話の例を見ると、第十三話では橋の上に現れた鬼は美女に化けているし、第四十一話では高陽川の辺には美しい女童に化けた狐が現れる。境界的な場は、この世と異界との接点であり、人と異類との邂逅の場になったが、同時に、異類が本来の姿から人間の前に現れる際の化身の姿となる場であり、反対に化身から本来の姿になる場でもあった。

例えば第十三話は、美女がもとの鬼の姿に変わった場がどこであったとはつきりとは記されていないが、おそらく橋の上のことだったと思われる。男は橋の中ほどで、美女を見かける

永藤 美緒

が「こんな所にいるのは鬼の化身だろう」と思つてそのまま黙つて通り過ぎようとする。すると女は「なぜ冷たく通り過ぎるのですか」と言うが、その時の声の恐ろしさに男は「頭・身ノ毛太ル様ニ思エ」たので、馬の足取りを早めて急いで行こうとする。次に「此ノ女、『穴情無』ト云フ音、地ヲ響カス許也」という文が続く。「女」という言葉が使われるのはここまでで、以降は「鬼」と記される。男が鞭打ち急がせる馬の尻を鬼は掴もうとするが、あらかじめ男が塗つておいた油のせいで手が滑る。男は後ろを振り返り、初めて鬼の恐ろしい姿を見る。鬼の姿の描写が続いた後は、男がようやく人里に出て、鬼は「吉や、然リトモ遂ニ不会ザラムヤハ」と言つて姿を消す。

女がどの時点で鬼になったのか、あるいは男がいつ橋を渡り終えたかは記されていないが、橋の途中で美女を見つけた男が、そのまま通りすぎようとした時点で、女は「頭・身ノ毛太ル」心地にさせるような声や、「地を響カス」ような声を出している。そしてそれ以降は「女」ではなく「鬼」と表記される存在とな

り、鞭打たれた馬にも追いつく勢いで走ってくる。男が橋の中間を通り過ぎた所で、女は「鬼」としか呼びようのないものになったと考えられる。橋が境界的な場所であるゆえに、異類が本来の姿になったり化身の姿になったりする変身の間であることがわかる。

また、この説話の類話である渡辺綱と鬼の遭遇を描いた屋代本『平家物語』「剣の巻」においては、綱が美女に化けた鬼と出会うのは一条戻橋である。美女が正体を現し、鬼となって綱の髻をつかむのは、「堀川東ノツラヲ南ヘ向テ行ケルニ正親町ノ小路へ今一二段計打出ル所」とあり、堀川のそばを歩いていた時である。川の中、あるいは川の近辺も境界的な場である。先にも述べたとおり、高陽川の辺には女童に化けた狐が出没する。

『今昔』において、巻二十七以外の巻に収められた説話でも、境界は変身の間として語られる。巻三十四話「人妻化成弓後成鳥飛失語」では、ある男が夢の中で妻に別れを告げられる。目を覚ますと本当に妻はいなくなっており、枕上に弓が残っていた。男は弓を、夢の中で妻が言っていた「形見」だと思って大切にしていたが、月日が過ぎたある日、弓は白い鳥になって南へと飛んでいった。男が雲に紛れる鳥を追いかけて、紀伊国に着いたところで鳥はまた人の姿になった。男は、自分の妻は普通の人ではなかったのだと思って帰った。妻が弓になり、次に鳥になり、最後でまた人の姿になる。

妻は夢の中で男に別れを告げ、弓になって枕上にいた。古代人にとって夢は、この世と異界の狭間だった。極楽往生を遂げた者が、誰かの夢に現れて「往生した」という話や、仏菩薩の

化身が修行者の夢に現れ聖地を教えるという話は仏教説話によく見られる。また枕上も家の中にありながら、異界との境界と考えられていた場所だった。守りの刀は枕上に置くものだったし、巻二十七第三十話では乳母が子供を守るために魔除けの米を枕上に撒いている。次に弓は鳥になるが、この変身はどこでなされたのか具体的に記されていない。男が弓を「前二立タル」とあるのみである。別れを告げられた夢から覚めた時のように、枕上に立てておいたのかもしれないが、確かなことはわからない。この鳥は、紀伊国でまた人の姿になる。紀伊国も境界的な場と考えられる。『日本書紀』にはイザナミは紀伊国熊野の有馬村に葬られたとある。またスサノヲの支配する根の国は紀伊国にあるし、後の時代に盛んになった熊野信仰においては、紀伊国熊野の海が極楽浄土に続いていると考えられた。

境界は異類との遭遇の間であり、変身の間だが、同様のことがうつぼ状の密閉空間においても考えられる。うつぼ状の密閉空間というにはやや広いかもしれないが、霊鬼の出没場所として、橋や川とともに塗籠や人の住まない古い建物も注目できる。うつぼ状の密閉空間は、魂・鬼・蛇などが宿る場である。このような空間が変身の間でもあったことは、三輪山型説話をはじめ蛇説話において明らかである。

箸墓伝承で櫛箱に入っていた蛇がその例である。大物主神は、櫛箱の中に籠もって乙女のもとに通う若い男になったり、蛇になったりする。またうつぼ状の空間に宿る蛇の説話の例として、巻十九第二十一話・第二十二話を挙げられる。これもうつぼ状の密閉空間で変身する蛇の話である。僧が供物の餅で作った酒

が酒壺の中で蛇になる話が二十一話で、破戒僧の別当が唐櫃に入れておいた供物の麦縄の残りが蛇になる話が第二十二話である。二十一話の酒は本当に蛇になったのではなく、執着心の強い僧には蛇に見えたのであり、後に捨てられた壺を見つけた男たちには、極上の美酒でしかなかった。だがこの説話の根底にも、蛇の変身の間としてのうづば状の密閉空間という観念を見ることが出来る。

境界や密閉空間など、異類との遭遇の場は、変身の間でもあった。本稿では境界的な場で起こる変身を「境界型」変身と、蛇のようにうづば状の密閉空間で起こる変身を「密閉型」変身と呼ぶ。境界や密閉空間だけではなく、異界に迷い込んだ者はもちろん異類との遭遇を余儀なくされる。異界が変身の間となっていることを、広川勝美が指摘している。<sup>(1)</sup>だが広川が挙げている例は、姿かたちのまったく違うものになる「変身」とは異なる。記紀神話において、イザナギ・大国主命・山幸彦が、それぞれ黄泉国・根の国・海神宮を訪問したことを例に挙げている。イザナギは黄泉国から帰り、天照大神やスサノヲをはじめ、万物の神々を生む創造主となる。大国主神は根の国を後にしてから、自分を死に追いやった八十神兄弟に打ち勝ち国造りを始める。山幸彦は海から戻ると、手に入れた潮満珠・潮干珠で兄・海幸彦の力を抑える。このように、異界がそこを訪問した者をより大きくする機能を持つ空間、「人間的変質」の間であることが論じられている。

異界を広川が述べるような「人間的変質」という意味での変身の間としている説話も、『今昔物語集』のなかには見られる。

例えば第二十六第七話・第八話の猿神退治譚は、外からやって来た犬山(犬を使つて狩猟を行う人)や修行僧が異界で猿神を退治し、英雄的な存在になる話である。異界ばかりではなく、境界的な場が「人間的変質」の間となる場合もある。卷二十六第三話「美濃国因幡河出水流人語」で大洪水から生き残った童は、水が引いた時、高い木の傍にいた。童は下の人に網を張らせてそこに飛び下り、死を免れる。小峰和明はこの説話について、木の上という異界の接点で童は再生し、樹下の人々に自らの救出法を指示する程の者へと変身していると述べている。<sup>(2)</sup>

話を「人間的変質」から「変身」に戻すが、異界で姿かたちの違うものへ「変身」する説話もある。卷三十一の異界訪問譚の一つ、第十四話では知らない所に迷い込んだ僧三人のうち二人は、笞で打たれると馬に姿を変えた。異界で人が馬へと変身させられている。この説話の舞台となる異界ははじめに山に踏入り、次に深い谷に踏入った末にたどり着いた所である。山や谷が異界への入口となっている。山や海は、異界への接点である境界であると同時に異界そのものである。異界が変身の間として描かれる説話も、「境界型」変身の類型と見ることが出来るだろう。

このように変身譚は「境界型」と「密閉型」とに分かれるが、両者の複合型もある。『古事記』で山幸彦を慕つて来た豊玉毘賣が子を産む時には、産殿を海辺に建てる。豊玉毘賣は、本来の姿で子を産むので決して覗くなど山幸彦に言つて産殿に籠もる。だが山幸彦は約束を破つて産殿を覗き、妻が八尋鯨になつて這う所を見てしまう。海辺という境界的な場に建てられた、密

閉空間である産殿で女が八尋鯨に变身する。〈境界型〉と〈密閉型〉の両方要素を併せ持つ空間で变身がなされる。

『今昔物語集』の説話においては、卷十二第二十七話「魚化成法花経語」を複合型の例に挙げることができる。病に苦しむ僧が、病気の時の肉食は罪にならないからと、童に魚を買いに行かせる。童は八匹の魚が入った櫃を持つて帰る途中、男に櫃の中をしつこく問われる。童は「経巻だ」と答えるが、男は「それは嘘だ」と童から櫃を取り上げて中を見ると本当に法華経八巻が入っていた。

男が童から櫃を取り上げて中を見るのは市に到った時である。市は複数の共同体の接点に立ち、様々な品物が取り交わされる場である。折口は「買ふ」が「代ふ」からきていると述べている。<sup>(3)</sup>まさに市は「買う」ことで物が別の物に「代わる」場で、变身の場となる境界である。童もまた境界的な存在であり、魚を手にしてたのが童だったということも重要な意味をもっているだろう。市・童と、境界にかかわる状況で、魚が経巻に変わっているが、もう一つ注目できるのが魚が櫃に入れられていたことである。櫃のなか、つまりうつぼ状の密閉空間である。

以上のように、变身譚には〈境界型〉〈密閉型〉とその複合型がある。境界との接点、あるいは境界に準ずる空間は、異類との邂逅の場であり、变身の場であった。变身にも、異類が本来の姿から化身の姿へ、あるいはその反対という变身ばかりではなく、人間が異類の不思議な力によって別のものに変えられる場合もあった。また魚が経巻になるといった、变身前も後もこの世に存在するものという場合もあり、变身するのは異界の超

自然的存在ばかりではなかった。

## (二) 〈密閉型〉から〈境界型〉へ

——道成寺伝承をめぐる

前項では变身譚において、变身の場に注目すると〈境界型〉と〈密閉型〉があり、時には両者の複合型も見られることを述べた。次に变身譚の一つである、道成寺伝承を取り上げて考察する。

道成寺伝承は今も道成寺で行われている絵解きの絵巻が有名である。これは十五世紀初期に成立した二巻から成る絵巻である。道成寺伝承は、『今昔物語集』にも収められている。それ以前文献では、『法華験記』に入っており、これが『今昔』に収められたものらしい。『今昔』の道成寺伝承は卷十四第三話「紀伊国道成寺僧写法花救蛇語」である。

熊野詣でをする二人の僧がいた。一人は年老いており、もう一人は若く美しかった。牟婁郡で二人は民家に泊まった。主である若い寡婦と、女従者二・三人の住む家だった。女主人は若い僧の美しさに心を奪われ、夜、僧の寝所に行って執拗に言い寄る。僧は拒否するが、女が引き下がろうとしないので、熊野詣でを終え、帰りにまたここに寄るので、その時に夫婦になろうと約束する。ところが約束の日になっても僧はやって来ない。女は行き来する人に尋ねると、熊野から来た僧がその二人の僧なら、帰途についてすでに二・三日になると答えた。女は僧が別の道から逃げたと知り、家に帰って寝屋に籠もった。そのまゝ死んで五尋ほどもある大蛇になって寝屋を出て、二人の僧を

追った。二人は大蛇を見て、かの女主人が邪心ゆえに蛇になったと悟り、道成寺に逃げ込んだ。道成寺の僧たちに事情を話すと、寺の僧たちは若い僧を鐘の中に隠し、老いた僧を連れて寺の中に隠れた。蛇は寺まで追ってきた。そして若い僧の隠れた鐘に巻きつき、尾で鐘を叩き二時三時と時間が過ぎた。蛇が去った後、寺の僧たちが鐘の中を見ると、若い僧は蛇の毒の熱で焼き殺され、わずかな灰が残っているのみだった。その後、道成寺の高僧の夢に若い僧が現れ、蛇に生まれ変わって女と夫婦になっていることを告げ、法華經の供養で助けてほしいと言う。高僧の法華經供養で、僧は兜率天に女は忉利天に生まれ変わる。以上が『今昔』の話の内容である。『法華驗記』では、若い僧の裏切りを知った女は寢屋に籠もって蛇になったとあるのみで、死んだという表現はない。だがいずれにしても、恨みを抱いて閨に籠もり、情念で蛇になったという〈密閉型〉の変身譚である。

一方、後の時代の『道成寺縁起』では、登場する僧は若い僧のみで、年老いた僧は描かれていない。だが、それ以上に注目すべき違いは変身の間だろう。女に追われる僧は日高川を舟で渡る。渡し守はあらかじめ僧に言い含められていたので、女は舟に乗ることができない。絵巻に描かれた女は、僧を追ひ日高川の近くに来たところすでに口から火を吐いて、上半身は蛇になりかかっている。そして渡し守に拒否されると、女は着物物を脱ぎ捨てて川に飛び込む。川に飛び込んだとたん、女は完全に蛇の姿となり、川を渡って道成寺に逃げ込む僧を追いかける。こちらでは川が変身の間となっており、〈境界型〉である。この

二つを比較して見ると、もともとは〈密閉型〉だった変身が〈境界型〉に変わったことになる。

道成寺伝承については、阿部真司も注目している。<sup>(4)</sup>阿部も道成寺伝承には、女が籠もって蛇になる「籠り型」と、蛇になった女が川を渡って男を追う「川渡り型」があることを指摘し、それぞれの型の源流を記紀神話に逆上って論じている。そして恥と恨みから男を追いかける女というモチーフを、イザナミや肥長比賣の伝承と共通のものであることに注目している。「籠り型」である『法華驗記』や『今昔』においては、僧が宿をもとめた女の家が「牟婁郡」で、「川渡り型」の『道成寺縁起』には「紀伊国室の郡眞砂」とある。阿部は「ムロ」という地名は籠める空間を示していると述べている。また、イザナミが葬られた熊野の有馬村が「花の窟」であろうと推定しつつ、「窟」と「ムロ」が同義のものであると述べている。このことから「籠り型」の道成寺伝承の女は、イザナミの流れを汲むものであるという。一方「川渡り型」は、肥長比賣にもとづいているという。『古事記』で、船で「海原」を逃げるホムチワケを、蛇身の肥長比賣はやはり船に乗って追いかける。「海原」とあるが、二人の出会いが肥河中流だったことを考えると、海ではなく川だったと考えられるという。「川渡り型」においては、女が僧を追ううちに上半身が蛇になり、川を渡る時に初めて全身蛇になる。このことから、阿部は「水の呪力（靈力）に触れることによる『死』と『復活』という水神信仰と蛇神信仰とが結合した時期に成立したものであろうか」と述べている。そして「イザナミ命型の『生むこと』自体に絶対的意味があった大地母神による『生』と

『死』の管理は失われ、農耕、製鉄技術の向上は母系制の共同幻想の変質を迫り、蛇神（大地母神）と水神、鉄神へと変質していかざるを得なかった。「籠り型」は水神と結びつく前の、イザナミから続く伝承の姿であるという。そして阿部は、『道成寺縁起』はイザナミ伝承と肥長比賣の双方を受け継ぐものであると、まとめている。

たしかに阿部が述べるように、肥長比賣伝承には蛇と水との結びつきをかいま見ることができる。だが変身の場合に注目すると、肥長比賣伝承も「密閉型」に近いように思われる。まず『古事記』の肥長比賣が蛇になる場面を引用する。

ここにその御子（ホムチワケ）、一宿肥長比賣と婚ひしましき。故、その美人を竊伺たまへば、蛇なりき。すなはち見畏みて逃げたまひき。ここにその肥長比賣患ひて、海原を光して船より追ひきたりき。

ホムチワケが肥長比賣と一夜の契りを結び、ひそかに相手を見たところ、美女のはずの肥長比賣が蛇だったという。闇で女は蛇に変身したと思われる。夜が明け、ホムチワケが朝の光に照らされた女の顔を見ようとしたところ、蛇だったのかもしれない。そうであるならば、夜の闇に光が射して変身していることがわかる。つまり、櫛箱という光の入らない密閉空間を開いたところ、大物主神が蛇になって入っていたことがわかる、といった「密閉型」の変身との共通性を感じさせる。

『道成寺縁起』には、阿部が指摘するような蛇神と水神の結びつきを読み取ることもできるが、変身の場合としての川という観念を見ることが出来る。そして成立の古い『今昔』や『法華

験記』の道成寺伝承と比べると、「密閉型」変身から「境界型」変身へ変わり、変身の場合としての境界がより強く意識されていることがわかる。

もちろん中世に入ってから「密閉型」の変身譚がなくなったわけではない。変身とはやや異なるかもしれないが、たとえば説経『小栗判官』の照手姫は、牢輿に入れられて海に流されて、高貴な姫君から放浪の女であり、小栗を救う巫女的な女であるという者になる。あるいはやはり説経だが、「山椒太夫」では顔に焼金をあてられた姉弟が、木湯船の下に閉じ込められていたところ、身代わりの地蔵が火傷を受け、二人の顔の火傷は跡形もなく消えていた。このように密閉空間が変身の場合であり、照手姫の巫女としての力や、地蔵の霊力が働く場として語られる話も見られる。だが道成寺伝承のようにもともと「密閉型」変身譚として語られていた話が、「境界型」になったという背景には、異界の接点としての境界がより強く認識されるようになったことがうかがえる。

### （三） 穢観と「境界型」変身譚

もともとは「密閉型」だった変身譚が、「境界型」として語られるようになる。それほどまで、異界の接点としての境界が強く認識されるようになった背景には、穢観が肥大したことが考えられる。伊藤喜良によれば、穢観は九世紀後半になって急激に肥大したという。八世紀後半から九世紀前半までは、謀叛の嫌疑を受けた早良親王の自殺や恵美押勝事件、薬子の変など朝

廷内での政權をめぐる血腥い事件が続いた。九世紀後半は王家内部が安定してきた時期でもあったという。そして軍事による政務から、「穢」や「怨霊」などが秩序觀念の中で大きな役割を演ずるようになったという。伊藤はこのような転換の理由として、律令制度の解体と、貴族層にも仏教が浸透してきたことも指摘している。

そして穢觀の肥大に伴って、死・血・産の穢のほか、鳥や獣の糞・病氣・災害・怨霊・物怪・犯罪など、人間に不快感を与えるあらゆるものが穢と見なされるようになった。その結果、天皇そして内裏全体の清浄を保つために、平安京への穢や疫鬼の侵入を防止する四角四界祭や、内裏の穢を除去する大祓や天皇の身体についた穢を川に流し去る七瀬祓が行われ、祭の際は陰陽師が活躍した。こうして穢を追放する先となる、辺境の地や外の地は穢れた地域であるという觀念が生まれた。

以上は伊藤の論だが、高橋昌明も四角四界祭や大祓について述べている。<sup>⑥</sup>このような祭は境界の地で行われた。例えば四角四界祭と似た祭として都城の四隅で「鬼魅」の外からの侵入を防ぐ道饗祭も挙げており、この祭の祭場に、しばしば怪奇譚の舞台となる一条戻橋や羅生門を想定している。また、一条戻橋はある時期まで大祓の祭場だったとも推測している。このような祭が繰り返し行われた理由として「古代人の意識に信仰、特有の境界觀」のほかに、当時の都市の生活諸条件の問題を指摘している。つまり、当時は衛生を中心とした生活環境が不十分で、疫病の流行を余儀なくされた。その結果「天皇およびその居所たる皇都の清浄を説く国家理念は、平安期に入って病的な

までに尖鋭化し、一方で陰陽師の働きとともに煩瑣な禁忌が人々の思考・感覚・日常生活を呪縛、他方で人の死<sup>⑦</sup>ケガレ觀にむすびついて、人による人の差別（ケガレた非人にたいする差別）を当然視する意識に発展」したと、やはり穢觀の肥大を指摘している。

災害や、衛生をはじめとする生活環境の不十分な整備から流行る疫病、そのために肥大してゆく穢觀。そして天皇や内裏を穢から守るために四角四界祭が、あるいはすでに身についた穢を落とすために大祓や七瀬祓がくりかえされる。「中央は清浄、周縁（外部）は穢」という構造は、都市が穢にさらされていたゆえのものだろう。都市が穢に蝕まれていなければ四角四界祭や祓を行う必然性もない。都市が穢れに侵されれば、それだけ「中央は清浄、周縁（外部）は穢」という觀念が強くなる。あるいは「中央は清浄、周縁は穢」にしろなくてはならなくなる。かくして穢が追いやられ、得体の知れないものが渦巻く境界や異界を舞台とした怪奇譚が、説話においても語られるようになる。ところで菅原道真が雷になって祟ったという話はあまりにも有名だが、災害や疫病は政權争いの敗者の怨霊の祟りと考えられることが多かった。<sup>⑧</sup>『今昔』卷二十七には内裏を舞台とした怪奇譚が多く収められているが、正体不明の鬼や物怪の話もあり、すべて政權争いの敗者と直接結び付けることにはやや無理がある。<sup>⑨</sup>だが九世紀半ばまで繰り返された、政權をめぐる血腥い争いにより失脚した者たちの怨恨が都市の澱として蓄積しており、この澱が、当時の人々の穢觀を肥大させた要因と考えることはできる。穢觀の肥大化は、境界の地を怪異なことの起こる



場とした。さらに境界をこの世と異界のものが行き交い、この世でも異界でもない揺らぎのある場であり、鬼や狐といった異類が本来の姿になったり化身の姿になったりする、変身の場合として語るようになった。

「中央（内裏や天皇）は清浄に、穢は境界や周縁へ」という観念は、中世に入ると衰退したのではなく、むしろより強まった。網野善彦の中世史研究<sup>⑧</sup>にも見られるが、犬神人など穢のキヨメを生業とする最下層の身分の者が、主に川原に住んでいたので「川原者」と呼ばれ、賤視・差別を受けたことから明らかであろう。

川はこの世と異界を隔てる境界であり、穢を流す場所でもある。この世でも異界でもない揺らぎのある空間であるゆえに、異類の出現や怪事が多い。さらに穢に触れている場所でもある。恨みを抱いた女が、男を追いかけて川に飛び込み、蛇になったということは、記紀神話の時代の蛇神と水神との結びつきを背景としていると同時に、穢に触れている境界に身を投じることでもあった。この世でも異界でもない揺らぎのある空間に身を投じること、この世の者だった女は異界のものである蛇に変身する。

さらに『今昔』巻三十一第十話には、嫉妬深い女は罪深い者で、来世は蛇に生まれ変わるだろうと言われたと語られているが、『今昔』の道成寺伝承にも、女の若い僧に対する情念・執念を罪深いことと述べる表現がいくつか見られる。例えば、二人の僧が大蛇に追われていると知った時には、「定メテ此ノ家主ノ女ノ、約束ヲ違ヌルニ依テ、悪心ヲ発シテ毒蛇ト成テ追テ来ル

ナラム」と思う。若い僧への執着や、恨みの心を「悪心」と記している。また若い僧が死後、蛇の姿で道成寺の高僧の夢に出てきた時にも、次のように女の罪深さを告げている。「悪女毒蛇ト成テ、遂ニ其ノ毒蛇ノ為ニ被領テ、我レ其ノ夫ト成レリ弊ク穢キ身ヲ受テ苦ヲ受ル事量無シ」

女を「悪女」と言い、蛇となった我が身を「弊ク穢キ身」と述べている。蛇になる女の心は罪深く、また蛇の身も穢れた忌まわしいものであるという。つまり情念・執念ゆえに蛇になる女は罪の穢に満ちた存在である。『今昔物語集』の時点では、蛇になる女の罪の穢は語っていたが、変身の仕方は、記紀神話のうづば状の密閉空間で変身する蛇という型を引き継いでいる。後には川に入るという話になったという背景には、川に流された穢の中には「罪の穢」も含まれていたことが浮かび上がってくる。だが川に身を投じた女は、罪の穢を清められたのではない。むしろ穢が川というこの世でも異界でもない空間の揺らぎを助長して、女の身を蛇に変じたかのようなのである。

以上のように、道成寺伝承において「密閉型」変身が「境界型」に変わったことについて述べてきたが、魂の籠もる場所・神の霊力が活性化する場所として密閉空間が変身の間となっていた記紀神話の時代にも、境界での変身は語られた。豊玉毘賣の八尋鮫伝承が、「密閉型」と「境界型」の複合型であることは先にも述べたとおりだし、変身とはやや異なるが、黄泉比良坂でイザナギが投げた蔓や櫛が葡萄や竹の子に変わることも、「境界型」のメタモルフォーゼと考えられる。

中世以降にも「密閉型」変身が描かれたことは、先に説経の

例を述べた。密閉空間も境界の地も、記紀神話の時代からずつと変身の間として認識されていたのだろう。ただし記紀神話においては、靈力の活性化する場所として、密閉空間のほうがより強く認識されていた。そして九世紀後期から肥大した穢観が、穢を追いやる場としての境界・周縁に対する人々の意識を深めたことにより、変身の間としては密閉空間よりも境界のほうが強く認識されるようになったことは考えられる。そのことを「密閉型」から「境界型」に変わった道成寺伝承に見ることができ

(注)

- (1) 広川勝美『神話・禁忌・漂泊 物語と説話の世界』 桜楓社
- (2) 小峰和明『今昔物語集の―樹―の風景』『中世説話とその周辺』 所収 明治書院
- (3) 折口信夫「日本文学史ノート」ノート編第二巻
- (4) 阿部真司『蛇神伝承論序説』 新泉社
- (5) 伊藤善良『中世王権の成立』 青木書店
- (6) 高橋昌明「境界の祭祀―酒吞童子説話の成立―」『日本の社会史・第二巻・境界領域と交通』所収 岩波書店
- (7) 正体不明の鬼を全て政権争いの敗者の怨念と結びつける馬場あき子の論(『鬼の研究』ちくま文庫)に、中川真(『平安京 音の宇宙』平凡社)や田中貴子(『百鬼夜行の見える都市』新曜社)は疑問を投げかけている。
- (8) 網野善彦『中世の非人と遊女』 明石書店など

※本稿は修士論文『今昔物語集』における異界・異類観』の第三章「変身譚をめぐって」に加筆したものである。

(なかふじ みお・博士課程一年)